

次の(1)～(5)の——線部の漢字をひらがなに、(6)～(10)の——線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- (1) チームワークを乱さないように自重する。
- (2) 畑に肥をやる。
- (3) 公金を私しることは許されない。
- (4) 人気のない山中。
- (5) 父の眼力は鋭い。すどど
- (6) 宿題をスます。
- (7) 都会にリョクチタイを増やす。
- (8) ダイヤモンドはキシヨウな宝石だ。
- (9) 相手のイトするところをさぐる。
- (10) ショウジマドから明かりがもれている。

二

次の(1)～(5)の()にあてはまる漢字一字を答えなさい。

- (1) 二人の争いのすきをついて漁夫の()を得た。
- (2) 成功しなかったのは()から出た錆だ。
- (3) 背()の陣をしいて勉強する。
- (4) どんなに注意しても、彼には()の耳に念仏だ。
- (5) 良薬は()に苦しいうから、忠告は素直に聞くべきだ。

次のカタカナの文章を読んで、漢字とひらがなと読点を正しく用いて書き直しなさい。

シッソナクラシブリカラカツテセカイイチマズシイダイトウリヨウトヨバレタナン
ベイウルグアイノムヒカゼンダイトウリヨウガライニチシニホンノダイガクセイニ
コウエンヲオコナッタ。ムヒカシハモノノアリナシデハナクコドクコソガイチバン
オオキナヒンコンデアリタニンノタメニナニカガデキレバジブンノカゾクモシアワ
セニナルトジシンノカンガエヲカタッタ。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（なお、作問の都合上省略した部分があります。）

日本は水の豊かな国である。山の森の大地から渾々と湧き出る泉、清澄な川の流れ、青々と水をたたえた湖——どこへ行っても、水のある風景に私たちは接することができる。

海外を旅すると、日本の水の豊かさにあらためて思いいたることがある。かつてインドを訪れたとき、どこまでも続く乾燥した大地や、そこを流れるひからびかけた川で、村の女たちが水がめに茶色く濁った水を汲んでいる姿を見て、日本の国土のありがたさを思わず悟ったこともある。

私たちの祖先は、古来、川や湖のほとりで生活を営み、文化を育んできた。そこから限りなく水を汲み、また水のある風景に心を慰めてきた。しかし振り返ってみると、私たちはその恵みに溺れて、資源としての水も風景としての水も、いつでもたやすく手に入るものと思いこんでいたのではないだろうか。

海外では、どこの国のレストランや喫茶店に入っても、日本のようにウェイトレスがだまってコップの水を持ってくることはない。場所によっては、水を注文すると、瓶に入ったミネラルウォーターを買わねばならないところもある。

そんなことから、私たち日本人は、水を空気と同じようにタダで手に入るものと思いこんでしまった。①きらいがある。お金を「（１）」のように使う」というたとえがあるように、水は、ほとんど使い捨てにするものの代名詞となってしまったように思える。ところが、アラブ諸国へ行くと、「水のように使う」という言葉は、モノを（２）に使うことを意味している。一滴の水も無駄にできない国々では、水は宝物なのである。

生活資源としての水に恵まれてきた日本では、人々は昔から水を巧みに利用するとともに、ひとたび水が暴れたときの脅威をできるだけ少なくしようと努力してきた。それは、いわば利水と治水両面での水の制御であった。水をめぐって地域どうしが争うこともあったし、その争いの中から、村と村、家と家との間のとりきめも生まれた。こうして、人々は水とのつきあいを通して水と親しみ、水の恵みの中で暮らし続けてきた。

ところが、一九六〇年代の高度成長期に入ると、大都市への人口集中や農村部の近代化などによる水道の普及と水需要の急激な増大にともない、人と水とのつきあいのパターンに大きな変化が生じてきたのである。とりわけ、大量に使われた水を排除

するのに必要な下水道の整備が追いつかないため、川や湖の汚染が進行し始めた。しかも、水道の蛇口さえひねれば無限の水が出るという便利さが、水への甘え、水のタダ観を助長したといってもいい。その裏では、美しく豊かであった水環境に、大きながけりが生じつつあった。

近年、水環境の悪化が象徴的に現れ、目に見えているのは湖の汚染であろう。環境基準の達成率を、海や河川と比べてみると、湖沼が最も低い。一九八四年度の達成率は、海が八一・三パーセント、河川が六三・四パーセントであるのに対し、湖沼は四二・七パーセントにすぎないのである。

人間と湖とのかかわりの歴史は古く、また多様である。青く静かな水をたたえた湖の風景は、昔から人々の心をなごませてきた。湖はまた、人間にとって貴重な水資源を提供してきた。湖は、いわば自然の大きな（３）であり、天候によって流水量が変化する河川に比べれば、水量がほぼ安定しているという利点もある。現在、日本で水道用に使われている水のうち、約三〇パーセントは湖の水が利用されている。たとえば琵琶湖の水は、京阪神地方一三〇〇万人の飲料水として使われている。このほか湖は、水中に生息する魚や貝類などの水産資源を提供し、また水産業にたずさわる人々の生活も支えている。

このように、私たちにとって貴重な存在である湖が、いま日本各地で危機に直面している。琵琶湖の南湖や諏訪湖では、汚染によって深刻な被害が出ているし、霞ヶ浦のようにほとんど死に瀕している湖もある。いったい、湖では何が起きているのだろうか。

霞ヶ浦や諏訪湖では、毎年夏になると、アオコと呼ばれる緑色の藻が大量に発生し、水面をおおってしまう。アオコは見た目に汚いだけでなく、死んで湖岸に打ち上げられたものは、腐ると悪臭を発する。また琵琶湖では、やはり夏になると、湖面が赤く染められたように変わる、赤潮という現象が現れるようになった。その上、霞ヶ浦や琵琶湖の水を飲料水として利用している地域では、水道の水がかび臭いとか生臭いとかいう住民からの苦情が、ひんぴんと寄せられるようになった。また、湖面に魚が死んで浮き上がったり、シジミのような貝が死滅するという被害も出始めた。

こうした汚染は、湖の中に植物性プランクトンが増殖するために起こるのである。アオコや赤潮は、ともに植物性プランクトンの仲間である。水道の水が臭くなるのは、こうしたプランクトンの増殖によるものだし、魚や貝が死ぬのは、プランクトンの死骸が分解するときに、水中の酸素が大量に消費されて酸素不足の状態になり、湖自身ももっている自浄作用が失われる

からである。(A)、プランクトンの大発生自体が、湖の汚れを物語っているのである。

ではなぜ、湖水のなかで植物性プランクトンが大発生するのだろうか。

湖には、周辺からいろいろな物質が流れこんでくる。当然のことながら、湖の周辺開発が進み、多くの人間がそこで生活を営むようになると、湖に流入する排水の量も増す。工業地域が開発されれば、工場からの排水もどんどん湖に流れこむようになる。化学肥料や農薬を使う田や畑からの排水もある。実は、そうした排水の中に、湖の生物の世界に大きな変化を引き起こす物質が溶けこんでいる。それは、おもに窒素や燐の化合物である。

窒素や燐の化合物は、生物にとって大切な栄養分であり、このような栄養分が湖水中に増えていく現象を、湖の富栄養化と呼んでいる。

栄養が豊富になれば、魚や貝がよく育つので、都合がいいのではないかと思う人もいるかもしれない。(B)、人間活動による排水が短期間に大量に流れこみ、急激に湖の富栄養化が進むと、それはまず植物性プランクトンのような下等な生物の繁殖に効き、その結果、アオコや赤潮が大増殖することになる。琵琶湖や霞ヶ浦のように、周辺に人口の多い湖で汚染が進行してきたのは、このような理由からである。

湖の最も特徴的な性質は、絶えず水が流れている川とは違って、長い間、水がたまったまま動きにくいという点である。

(C) 水が汚れ始めると、汚れた水はいつまでも湖の中に蓄積され、容易に入れかわることはない。その間にも、湖の周辺からは栄養分が供給され続けるために、湖の汚染は進む一方なのである。

富栄養化がさらに進行すれば、水中の酸素はますます欠乏し、アンモニアのような有毒物質がたまって、生物は次々と死滅する。こうして、湖の中で保たれていた生物界のバランスは失われ、湖はその機能を果たすことができなくなる。

湖の汚染は、日本だけの問題ではない。世界各国ともに共通の悩みを抱いているのである。一九八四年八月、滋賀県の琵琶湖で「第一回世界湖沼環境会議」が開催された。湖の環境保全をめぐる第一回の国際会議が、日本の琵琶湖で開かれたことは、たいへん意義深いことである。この会議では、湖の富栄養化や酸性雨禍について、各国の実情が報告され、科学者、行政、住民それぞれの立場から、今後何をなすべきかについて真剣な討議がかわされた。人と湖との共存をめざして開かれたこの会議は、国内でも大きな関心を呼び、多大な成功をおさめた。

湖の汚染が日本で顕在化し始めたのは、(D)年代後半からである。経済発展とともに、開発の手が、それまでは人のあまり住んでいなかった湖の周辺地域にも及び、人口や産業の集中が始まった。その結果が、人間にとって大切な環境である湖の汚染というかたちで、人間自身にはね返ってきたのである。それはまさに、社会の繁栄が招き寄せた環境の悪化であった。

本来、湖は、自然のままでも、何千年とか何万年という長い時間の中で、ゆつくりと富栄養化への道をたどっていく。まわりの川から、自然の栄養分が少しずつ流れこんでくるからである。しかし、いま人間は、湖が何千年、何万年かけてたどる富栄養化への過程を、わずか数十年の間に進めてしまっている。それは湖にとって、かつて経験したことのない、あまりにも急激な変化なのである。

湖沼環境に対する、さらに重大な危険要因が最近提起されている。それは、湖に混入する毒性物質の問題である。一九八六年五月に、アメリカのミシガン州で開かれた第二回の「世界湖沼環境会議」のテーマは、世界中の湖における毒性物質汚染の問題であった。

P C B、ダイオキシン、トリクロロエチレンなど、人間の科学技術が生んだ毒性物質が、知らず知らずのうちに湖を汚染し、魚などの体内に蓄積している現状が、各国から報告された。先端産業の洗浄剤に含まれるトリクロロエチレンなどは、地下水を汚染し、それがさらに湖に流入する。あるいはダイオキシンのように、水を通してだけでなく、大気中を伝播して湖に混入するものもある。これら発がん性の強く懸念されている物質が、湖沼を汚染している現実が、人類の将来に対する重大な警告と受け止めねばならないだろう。さいわい日本では、毒性物質による湖の汚染は、それほど顕在化していない。しかし毒性物質による汚染は、それが始まって、富栄養化の場合とは違って、人間の目には見えないという特徴がある。そして気がついたときには、すでに手おくれになっているという恐ろしさ、そこには潜在しているのである。

先端技術がもたらした生活の便利さの裏に、人間の生存すら危うくさせる危険因子が潜んでいることを、私たちは自覚しておかねばならない。

このままにしておいては、湖は、いつか死んでしまうにちがいない。湖が死ぬということとは、人間もまたその水を資源として使えなくなることの意味している。いま湖を救わなければ、私たちは、子孫のために美しい水を残してやることができない。それは、来世紀、さらには来々世紀に対する、われわれ世代の責務なのではないだろうか。

問一 本文中には次の一文が抜けています。どこに入りますか。直前の五字を抜き出して答えなさい。

日本だけが別格なのである。

問二 本文中の（Ａ）（Ｂ）（Ｃ）にあてはまる言葉として最もふさわしいものを、それぞれ次のア～ウの中から一つずつ

選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ しかし ウ だから

問三 本文中の（１）にあてはまる言葉として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 汗水あせ イ 真水 ウ 冷水 エ 湯水

問四 本文中の（２）にあてはまる言葉を、自分で考えて漢字二字で答えなさい。

問五 本文中の（ 3 ）にあてはまる言葉を、本文中から三字で抜き出して答えなさい。

問六 本文中の（ D ）に入る年を答えなさい。

問七 ——— 線部①「きらい」の意味として、最もふさわしいものを次のア～ウの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 好みに合わないこと。嫌だいやと思うさま。

イ 望ましくない傾向けいがあること。

ウ 区別をつけること。差別。

問八 ——— 線部②「機能」とありますが、これと同じ内容の言葉を、本文中から漢字四字で抜き出して答えなさい。

問九

——線部③「さらに重大な危険要因が最近提起されている」とありますが、それは今までの問題と比べてどのような特徴があると筆者は考えていますか、二つ答えなさい。

問十

河川と比べた時の、湖の長所と短所をそれぞれ簡潔に答えなさい。

問十一

——線部④「いま湖を救わなければ」とありますが、湖を救うために実際にあなたはどのようなことをすればよいと思いますか。二百字以内で書きなさい。

(二月一日午前)

多摩大学附属聖ヶ丘中学校

受験番号			

氏 名	
-----	--

得 点
*

*印のところは、何も記入しないでください。

(8)	(5)	(1)
		(2)
(9)	(6)	
	ます	(3)
(10)		(7)
		(4)

小計 一

*

二

(1)	
(2)	
(3)	
(4)	
(5)	

小計 三

*

A blank sheet of graph paper featuring a uniform grid of small squares. The grid consists of 20 columns and 20 rows, creating a total of 400 square units. The lines are thin and black, set against a white background. There are no margins, text, or other markings on the page.

小計	三
*	

*実際の解答用紙はB4判です。

